けせん医報

目次

●巻頭言

気仙医師会長　滝田医院　院長　滝　田　　有……2

●理事会報告

■令和３年度第５回理事会報告……3

■令和３年度第６回理事会報告……6

●随　想

「医者の淘汰？」

うのうらクリニック　院長　鵜　浦　哲　朗……14

「呑むために歩く、のは止めてこぐ」

星こどもクリニック　院長　星　　篤　樹……15

●研修医日記

岩手県立大船渡病院　２年次研修医　菅　野　　泰…16

●会員の退会・異動のお知らせ……17

●訃　報……18

●事務局日記……19

●編集後記……20

●表紙のことば……20

KESEN-ISIKAI

第１６０号

2022. 4. 25

気　仙　医　師　会

岩手県大船渡市盛町字内ノ目６－１

TEL：0192-27-7727　FAX：0192-26-2429

http://kesen-med.or.jp/

気仙医師会広報部　発行　令和４年４月25日　製作：村田プリントサービス

巻頭言

瓦礫からコロナまで～10年を振り返って～

気仙医師会　会長
滝田医院　院長
滝　田　　有

大津波の記憶も生々しく、街には瓦礫が散乱していた2012年に会長に就いた。恒例行事の開催もままならぬ中、自治体や保健所との会議がやたら多かった。政府の復興会議のメンバーや、日医会長・復興相など要路の方々をホテルのロビーであれ新幹線車中であれ、所構わず捕まえて当地の現状を直接伝えた。被災と復興に関する講演も2011年の神戸を皮切りに2020年まで全国を巡った。

被災して露わになったのは医療資源の脆弱性であった。多職種の緊密な連携が必要だと共通の認識が生じ、一般社団法人「未来かなえ機構」を立ち上げた。２市１町の強力なバックアップにより財政面はもちろんだが、広報面でもそれは顕著であり、全国の健康情報サービス（ＥＨＲ）の中で住民加入率はトップクラスである。今後医療的ケア児のパスを先駆けにして広くクリニカルパスを作成・拡大していく。また機構は住田町（開業医がゼロ）に24時間対応の訪問看護ステーション「すみちゃん」を設立。看護師に人を得て、がんや難病などに対応している。

仮設住宅がすべて撤去され、街を走るダンプも目に見えて減り、復興も概ね成ったと考えられた2020年。二類相当の感染症に指定されたＣＯＶＩＤ－１９、内科医が発熱患者を診療出来ないという異常事態が生じた。今に至るまでターニングポイントは３回あった。最初は2020年７月の地域発熱外来（ＰＣＲセンター）の創設。二番目は同年10月からの診療・検査医療機関の指定。三番目は2021年３月からのワクチン接種の実施である。いずれも二次医療圏ごとの裁量が求められ、郡市医師会の重要性が増した。ウィズコロナの今後は如何に軟着陸するかが課題であろう。

2022年３月、県立高田病院の田畑潔院長が急逝した。謹んでご冥福をお祈りする。先生のリーダーシップにより、高田病院はＣＯＶＩＤ－１９の行政検査を数多く行い、早い時期から感染者の入院を受けた。今回は殉職と言ってもよく我々は最大の弔意を示さねばならない。

コロナ禍の下、学会も講演会もＷＥＢで済ませる風潮が強い。斯く言う私もその恩恵に浴してはいる。しかし人間関係の基本は直接対話である。新しい会長の下、対面する日常が復活し医師会も未来かなえ機構も良い形で発展すること祈っている。

随　想

「医者の淘汰？」

うのうらクリニック　院長
鵜　浦　哲　朗

リバイバルがあると気になって見てしまう映画がある。自分が医者になりたての頃に封切られた、ブレードランナーという映画だ。人間とレプリカントと呼ばれる人間そっくりの人造人間が共存する、近未来の物語である。主人公は警察の捜査官で、人間社会に人間になりすまして紛れ込もうとするレプリカントを見つけ出して抹殺するのが仕事だ。レプリカントの中には細かい記憶までインプットされており、自分が人造人間であることを自覚していない者もいる。

判別は困難で厄介である。判別には対象をまるで嘘発見器にかけるのと同様に、数多くの質問をして、被験者の瞳孔の変化・発汗の具合・心拍数・呼吸数をみて、本当に人間なのか判断する手法が取られる。心理テストでどんな動物が好きか答えると性格を言い当てられる、あの感じである。看破られたレプリカントは抹殺されるのだから大変だ。主演のハリソン・フォードが冷徹にそして確実にレプリカントを追い詰めてゆく。本人さえ知らない真実を炙り出してゆく。

待てよ、これって医者の診察そのもの？多くの質問をして（問診）、被験者（患者）の反応を捉えて（診察）、判別して（診断）、抹殺する（治療）。時に全く自覚症状のない患者さんの病気を見つけ出すのである。

コロナ禍の流れで、今オンライン診療が浸透し始めている。対面診療に比べてオンライン診療は、問診と、診察は画像を通した視診に制限されて、診断は難しくなり、治療にもなる手当てもできない。近い将来、患者さんの利便性に応えていった結果、その先に広がるAI診療の普及によって、医者の仕事が抹殺されなければ良いのだが。

「呑むために歩く、のは止めてこぐ」

星こどもクリニック　院長
星　　篤　樹

「モヒカン娘」「ビキニ娘」「ちょっとはじけた裏ビキニ娘」「パンダの赤ちゃん」この段階で、何を書こうとしているか分かる人はちょっと危ないです、いろいろな意味で。「山間（やんま）」「村祐」「射美（いび）」「而今（じこん）」この辺りで分かった人は多いでしょう。全て日本酒の銘柄です。私自身が酒を呑み始めた頃、日本酒は臭いでむせ返り、喉に嫌な刺激があるまずい酒というイメージしか持てませんでした。その後に淡麗辛口の日本酒ブーム（越乃寒梅や上善如水など）がありましたが、美味しいと思って呑んだ記憶はありません。和食だから呑むだけで、その座も焼酎に脅かされていました。しかし４，５年前でしょうか？近年、多くの蔵元が東京農大等で醸造学を学んだ世代へ代替わりし、彼らは様々な挑戦をして個性的な酒を造っていると本で知りました。気になり取り寄せてみたのが「村祐」。一口呑んでたまげました。びっくりする位の甘口、それでいてしつこくなくサラッと呑める淡麗、しかし旨味はしっかりと濃厚。本では「淡麗甘口濃厚」とよく分からない表現を使っていましたが納得しました。これならいろんな銘柄を呑んでみたいと思いましたが、人気銘柄は定価の数倍出さないと買えない（有名な「十四代」は２万円以上）、他の酒との抱き合わせのみの販売、いつ見ても売り切れ。ネットで良心的な酒屋を見つけ、激しい競争の中から少しずつ手に入れて呑み始めました。旨さを感じず少し飲んで料理酒に回したものもありますが、旨すぎてつまみが邪魔と思うほどのもの、相性抜群のつまみを見つけ延々と呑み続けてしまうもの（あやうく４合瓶を空けちゃうところでした）、いろいろな酒と出会えました。写真は今年１月時点での冷蔵庫、前列中央の２本はかなりレアです。呑んじゃいましたが。

しかしこうなると心配なのが健康問題。以前は重りをしょって歩き回っていましたが、景色に飽きたことと悪天候時は歩く気がしないためさぼり気味。定期的に遠藤先生の所に通っていますが、最近の診断は（省略）。こりゃいかんと始めたのがエアロバイク。今はジムでも使うような本格的なものでもお手ごろな値段、意外と場所も取らず音は本当に静か。動画を見ながら週３・15分位から始めて、今では週６～７・30分位、これで全身汗だくになります。痩せなくてもいい、体形も気にしない、浴びるほどでなく休肝日を作った適度な晩酌を続けられる体を作るためこぎ続けています。

秋に仕込まれた新酒の季節もそろそろ終わり（２月初旬にこの原稿を書いています）。試してみてはいかがでしょうか。個人的には最近多くの蔵元が造っている「にごり酒」がお勧めです。酒にぴったりのつまみが見つかった時の気持ちは何とも言えません。

研修医日記

岩手県立大船渡病院　2年次研修医

菅　野　　泰

2020年4月から始まった研修医生活もこの3月で修了する。まるまる"コロナ禍"であったが、医師として何から何まで学ぶことが尽きない2年間であった。ちょうどこの文章を書いている3月、震災から11年だとテレビ番組がやっている。研修医日記には何を書こうか、書けないまま引き延ばしてしまっていた。ちょうど研修医も終わるタイミングであり、どうしてここで研修医をやっているのか、振り返り今思うことを並べてみる。全く文章とは言えないがご容赦いただきたい。

私は陸前高田市広田町出身である。広田出身の医師には出会ったことがなく、物珍しがられる。どうして医師になったのかと尋ねられると返答に困ってしまう。はっきりとした理由があったわけでもない、ただ漠然と育ててもらった広田、陸前高田、気仙地域に恩返しがしたかっただけだと思う。

中学卒業までは広田で育ち、高校進学で人と同じところは嫌だ、吹奏楽を上手いところでやりたいと、母の母校でもある盛岡三高に進学した。母は昔から医者になれと口酸っぱく言ってはいたが、血は怖い、もらいゲロするタイプの自分には向いていないと、進路の選択から消していた。理系であり工学部や理学部に進むのだろうなと考えていた。

そして、高校1年の終わりに東日本大震災が起こった。幸い広田の家族、親戚筋に震災で亡くなった者はいなかったが、大槌に住んでいた母方の祖母が家ごと流出し行方不明となった。1週間ほどして広田に戻ることができ、陸前高田市街地の、広田の、大きく変わってしまった風景を見て、筆舌に尽くしがたい、ただ茫然とした思いを感じたことだけは覚えている。なんでもいい、自分にできることはなんだろうか、どうすれば地域のためになれるだろうか、それが医師を目指した一番の最初かもしれない。それから、進路希望調査に医学部を書くようになり、受けるだけ受けてみるかと受験をし、運よく合格となった。震災の時、地元でやれることやりなさいと担任の先生が5月頃まで公欠にしてくれたお陰で高校では皆勤賞をとることもできた。下宿の玄関で氷に滑り足を骨折し、卒業式を松葉杖で歩いたのもいい思い出である。

大学に入学すると医学の大海原で何を勉強すればいいのか分からず、大学の先生方から言わせると"間違って"進級を繰り返したが、ついに卒業試験に引っ掛かり留年、都合7年で大学を卒業した。6年生の2回目は東京の医師国家試験予備校に通い、初めての都会暮らしを楽しんだりもした。今思えばコロナ前最後の一年であり、アイドルライブに足を運んでみたり、東京ドームでプロ野球のオールスターを観戦したり、関東近郊鉄道乗りつぶしの旅に出たり、親不孝も大概であった。無事卒業試験、国家試験には合格した。

そして地元の病院だからと大船渡病院で研修を始めた。多い時には月6回の当直、月の半分の呼び出し当番など、それなりに忙しかったが、同期、先輩後輩に恵まれ、一通り医師として最低限のことはできるようになったのではないかと思う。指導医の先生方、医療スタッフの方々には大変良くしていただいた。医師の諸先生方には特に言うまでもないことであるが、ペーペーの研修医よりもベテランの看護師さんのほうが患者さんを"診れる"のは当たり前と思われる。最初の頃は看護師さんにたくさん教えられ、時には悔しい思い

もした。オーダーの出し方、点滴の取り方、アンプルカットの仕方、何から何まで教えていただいた。そのような多大なバックアップがあってこそ、大船渡病院での研修医生活を乗り切れたと思う。岩手医大で働くこともあったが、研修医の僕たちよりも若い看護師さんと当直が一緒で不安に駆られ、大船渡の多大なバックアップに大船渡を離れた時に初めて気がついたのであった。

私は4月から岩手医大の麻酔科に進むことに決めた。私のゴールは地元で医師をしていることであり、奨学金のために県内過疎地域の医療機関で働く必要もある。内科は性に合わず外科系を考えていたが、どの科もピンとこず、ふと義務で回った麻酔科に惹かれた。何に惹かれたのかははっきりしないが少なくとも嫌いではなかった。大船渡病院に麻酔科の常勤医が不在であるというのも理由の一つではある。これからどのような人生をたどるのか神のみぞ知るところではあるが、年齢を重ねて救急対応が辛くなったら町内唯一の医療機関である国保広田診療所で働かせてもらうかもしれない。このけせん医報が発行されている頃には、手術室にて"何もトラブル起きないで"と無事に手術が終わることを祈っているのだろうか。

最後に、私と仕事をしてくださった皆々様、やることなすこと全て応援してくれた家族、私と出会ってくださったすべての方々に感謝を示し、この文章を終わりとさせていただきます。

また近い将来、気仙地域で働けることを願いながら。

最後まで読んでくださりありがとうございました。

● 会員の退会・異動のお知らせ

退会会員

ご協力ありがとうございました。

石木幹人先生（陸前高田市国保広田診療所長）
鈴木高先生（陸前高田市国保二又診療所長）
木村博史先生（岩手県大船渡保健所長）
石川秀太先生（岩手県立大船渡病院）
菅野泰先生（岩手県立大船渡病院）
近藤大樹先生（岩手県立大船渡病院）
近藤優希先生（岩手県立大船渡病院）
鈴木翔太先生（岩手県立大船渡病院）

退会年月日　令和4年3月31日

異動会員

引き続きよろしくお願いいたします。

大津修先生（岩手県立大船渡病院⇒大津医院）

異動年月日　令和4年3月31日

― 訃　報 ―

― 謹んでお悔やみ申しあげます―

岩手県立高田病院　院長

田畑（たばた）　潔（きよし）　先生

令和４年３月３日ご逝去（満61歳）

学　　歴

昭和35年12月１日生まれ

昭和54年３月　筑波大学附属駒場高等学校卒業

昭和60年３月　東北大学医学部卒業

平成５年３月　東北大学大学院修了

職　　歴

昭和60年５月　酒田市立酒田病院外科

平成62年５月　仙台社会保険病院外科

平成５年７月　JA秋田厚生連由利組合総合病院外科　医長

平成８年11月　岩手県立北上病院外科　医長

平成10年４月　岩手県立北上病院　外科長

平成21年４月　岩手県立中部病院　副院長心得

平成22年４月　岩手県立中部病院　副院長

平成25年４月　岩手県立高田病院　院長

役　員　歴

平成25年４月～令和４年３月　　気仙医師会　理事

自　宅　〒029-2205　陸前高田市高田町字太田521番地２

編集後記

年明け早々、本誌発刊に当たり寄稿をお願いした各先生方には、日々の業務で忙しい中、快諾して頂き感謝申し上げます。

巻頭言を寄せて頂いた滝田医師会長にはこの１０年間震災直後という大変な時期に役職に付かれご苦労があったと思われます。長年のご尽力とご功労に心より感謝の意を表します。

鵜浦哲朗先生の医者の淘汰？にはギクリとしました。確定診断はＡＩドクターにつけてもらう時代がすぐ来そうですね。電子カルテと一体化してもらえば有り難い。

星先生のお酒に関する一家言には感服いたしました。小生も学生になってはじめて知った日本酒、飲みやすい越乃寒梅を思い出しました。

研修医菅野先生、そうでしたか広田出身、30 年以上前の自分を思い起こしました。これからも専門問わず様々な知識・技量を身につけ将来気仙地方生まれの医師として地元に貢献されることを期待しています。

現実には起きて欲しくない災害、戦争がこの瞬間にも起きています。歴史上の事柄では無く、まさにその歴史になることを目の当たりにしています。世界の、日本の安寧を祈ります。　　（M.C）

表紙のことば

写真は、大船渡市末崎町でワカメのボイル加工作業です。震災復興で高く聳える防潮堤を背に多くの養殖者たちが一斉に加工に取り組んでおりました。

今年の出来は水温がやや低かったため、生育は悪いそうですが、その分値段が高く三月初めから始まったこの作業は 4 月一杯続きます。

（写真提供：村田プリントサービス）